

氏 名	すえ ちか こう た 末 近 浩 太
学 位 の 種 類	博 士 (地域研究)
学 位 記 番 号	地 博 第 5 号
学位授与の日付	平成 16 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	アジア・アフリカ地域研究研究科東南アジア地域研究専攻
学位論文題目	現代シリアにおけるイスラームと政治 ——イスラーム改革思想とムスリム同胞団をめぐる考察——

論文調査委員 (主 査) 教 授 小 杉 泰 助 教 授 東 長 靖 助 教 授 田 辺 明 生

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、中東地域の重要な一部をなす現代シリアについて、20世紀における国家と地域の編成過程を、イスラーム思想と政治との動態的關係に着目しつつ分析・考察するものである。特に、イスラーム改革思想及びそれを体現する大衆運動について、テキスト分析を含めた実証的考察を行なっている。

まず最初に、国家の形成・変容に関して、従来の研究史を総合的に検証し、いわゆる「共和国シリア」を地域としてのシリアと同一視する立場を批判して、「歴史的シリア」を考察の対象とする必要性を論じている。その上で、歴史的シリアに形成された既存のネイション・ステイトを「小シリア群」とする視点を提出し、それらを単位とする一国主義的な研究、あるいは逆に、アラブ統一の立場から行なわれるアラブ民族主義的な研究がいずれも、地域の実態を分析するうえで適切ではないことを論究している。また、従来の研究では、世俗主義がある程度与件とされてきたが、それについてもイスラーム思想という座標軸の設定によって克服を試みるべきことを提起した。

以上のような認識を前提に、第1部では、中東地域研究における方法論の問題を詳論している。主として従来の研究は、それぞれ既存のネイション・ステイトを単位とした「一国研究」、アラブ民族の存在を前提とした「アラブ諸国家研究」に大別される。これらの研究の構図について、本論文は、第1に、既存の国家とアラブ人の政治意識との間に乖離が生じること、第2に、外来の理念としてのナショナリズム論に依拠することによって、地域政治の実体的把握に齟齬が生じること、第3に、西洋的近代化論および政教分離の原則を自明視する結果、この地域において決定的な重要性を持っている宗教思想、特にイスラームの政治的役割が無視または過小評価されてきたと、強く批判している。

現代シリアにおける民族や国家と宗教を理解するための分析枠組みとして、本論文は、オスマン帝国の解体・終焉が現代シリアの地域編成の分水嶺をなしているとの認識のもとに、それまでのイスラーム的地域編成原理を「ウンマ・ダウラ二重中心構造」と名付け、英仏による「シリア分割」を通してもたらされたネイション・ステイト・システムを「単一中心構造」と呼び、両者の間に「パラダイム転換」が生じたと分析する。

しかも、この転換はすでに完了した歴史的過程ではなく、今日に至るまで歴史的シリアに属する各地の政治過程を規定している。いわば、20世紀における「シリア分割」は今日まで継続する「未完の物語」として、長いスパンを持った構造的なものと捉えられる。

第2部は、両大戦間期における「シリア分割」の推移と、当時のイスラーム思想家のなかで最も重要な1人であるシリア出身のムハンマド・ラシード・リダー（1865-1935）を取りあげている。リダーのシリア統一、シリア独立運動についての具体的な活動と思想的な主張を、原典から抽出している。リダーの構想は、当初の帝国の改革から統一アラブ国家の建設へと移行したものの、一貫して「ウンマの再興」という究極的な目標を視野に置くものであった。リダーは、アラブ民族主義者の初期世代の1人として評価されてきたが、本論文はむしろ彼が「ウンマ・ダウラ二重中心構造」に基づいた世界を構想し、イスラーム法の現代的革新を通して、ダマスカス・アラブ政府と隆盛するアラブ民族主義の「単一中心構造」的属性と

の理論上の解決を目指したことを明らかにしている。

第3部および第4部は、リーダーらのイスラーム改革思想を大衆運動の形で展開したシリア・ムスリム同胞団の政治思想・活動を考察している。時代的には、第3部が、共和国シリアが独立を達成したあとの、本論文が「ポスト独立期」と呼ぶ時期で、この時期の考察対象は、シリアにおける同胞団の設立者で初代指導者であったムスタファー・スィバーイー（1915-1964）である。スィバーイーについては、彼が提出し、当時大きな影響力をもった「イスラーム社会主義」を中心に、その社会改革理念を紹介・分析し、考察を加えている。

第4部は、時代的には、独立した共和国シリアの国家の枠組みが固まっていた時期としての「国家統合期」で、これは現在に至るバース党政権が成立した以降にあたる。この時期の考察対象は、当時の同胞団の主要なイデオログであったサイード・ハウワー（1935-1989）である。ハウワーは多作家であるが、主著『神の兵士』を詳細に分析することで、彼の運動論と国家論を明確に提示している。

論文審査の結果の要旨

中東地域研究は、日本においても世界的にも、過去30年ほどの間に質・量ともに向上し、さまざまな研究がなされるようになってきた。政治と思想をめぐる研究も、次第に厚みを増している。しかし、本論文の対象となっている歴史的シリアは、その重要性がしばしば指摘されるにもかかわらず、相対的に研究上の空白となっている地域である。

そのような地域を取り上げた本論文は、まずこれまでの研究史を批判的に総括しているが、従来の研究が、既存のネイション・ステイトを前提とする「一国主義」的研究と、アラブ統一国家を理念上の前提とする「アラブ民族主義」的研究に分極化しており、いずれも歴史的なシリアを的確にとらえていない、と評価しているが、これは理論的にも重要な指摘である。また、近代化や政教分離が暗黙裏の前提とされているがゆえに、イスラーム思想の役割が無視されてきたという点も、妥当な評価であろう。これまでのシリア研究では、政権党としてのバース党に焦点が集まりすぎていたことは明白である。本論文は、代替的な見方として、歴史的にシリアに形成された既存のネイション・ステイトを「小シリア群」とする視点を提出しているが、これは卓見である。

従来でも、歴史的シリアを「大シリア」と呼び、共和国シリアの領土的拡張主義を「大シリア主義」とみなす立場はあった。また、歴史的シリアがシリア、レバノン、ヨルダン、パレスチナに分割されたという認識はそれなりに共有されていたが、それが今やネイション・ステイトになったとみなすのが通常の立場であった。しかし、いずれの立場も、歴史的シリアを構成する諸国が、独立主権国家の通常の関係には見られないような相互浸透化した関係を持っていること、ムスリム同胞団のようなイスラーム運動がこれらの国々の国境を越えて連携していることなどを、十分に説明できずにきた。これらの国々が、全体として「小シリア群」をなしているとの理論的提起は、この地域における現実を表現する概念として、非常に高い有用性を持っているであろう。総合的な地域研究をめざす立場から見て、非常に説得性が高いと評価される。

歴史的シリアが「小シリア群」に移行する過程で、その過程をいかにとらえ、またその過程に主体的に関わることで、それをいかに変容させようとしてきたかが、この地域の民族・国家・宗教をめぐる思想的課題であり、それを考察することを通じて、地域編成の論理が把握しうるというのが、本論文の次の骨子である。そこにおいて、2つの面で大きな貢献がなされている。

第1は、理論的な面である。本論文は、オスマン帝国末期から、英仏による委任統治期、さらにその後の独立期に至る間に、地域編成をめぐるパラダイム転換がなされたとする。端的に言って、それは、イスラーム的地域編成原理としての「ウンマ・ダウラ二重中心構造」から、「単一中心構造」のネイション・ステイト・システムへの転換であった。二重中心性は、イスラーム的な宗教・民族・国家認識を的確にとらえた命名・分析であり、それを基準にしてネイション・ステイトを単一中心性によって特徴づける考え方は、地域の論理によって、従来の西洋中心的な分析枠組みを中和化する試みとして、大きな価値を有している。イスラーム思想を分析する上でも、この枠組みが有効であることは、続く実証分析を通して、明確に示されている。

第2の貢献は、実証的な面である。本論文は、シリア出身の主要な思想家として、イスラーム改革思想家ムハンマド・ラシード・リダー（1865-1935）、リダーらの思想を継承し、大衆運動としてのムスリム同胞団をシリアに創設したムスタフ

アー・スィバーイー（1915-1964）、それを継承・発展させ、同胞団のイデオログとして政治論や運動論を展開したサイド・ハウワー（1935-1989）について、アラビア語原典のテキストを読解するとともに、シリアにおけるフィールドワークを通じて、社会の中における彼らの思想の意義を考察している。

リーダーについては、従来、イスラーム改革思想についてはかなり紹介・分析がなされているが、シリアの独立・統一についての具体的な活動・政治的主張の分析はこれまで全くと言っていいほどなかった。その空白を埋めた功績は大きい。また、スィバーイーは、その重要性が重々認識されつつも、これまで研究がなされてこなかったが、彼の思想と事跡を検証し、『イスラーム社会主義』という1960年代にアラブ世界で大きな影響力を持った著作を、丁寧に紹介・分析したことの功績は大きい。さらに、ハウワーは、現在のシリアにおけるイスラーム運動およびシリア社会におけるイスラームの位置づけを考える上で欠かすことのできない思想家であるが、それをきちんと評価し、主著『神の兵士』を分析、紹介したことは大きな意義を持っている。ハウワーの著作と思想は多岐にわたっているが、それらを今後研究する上でも、本論文がその基盤を整備したことは高く評価される。

空白部分が大きい現代シリア研究について、理論的な面から全体象を提示しつつ、その枠組みを前提として個別の実証研究を進めた本論文は画期的な意義を有しており、中東地域研究、特にシリアの政治とイスラーム思想をめぐる研究に寄与するところが大きい。よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成16年1月29日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。